

御所市文化財調査報告書 第 5 集

奈良県御所市

本馬西遺跡

昭和61年3月

御所市教育委員会

例　　言

1. 本書は、御所市大字本馬字田中・ワキに所在する本馬西遺跡の試掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は、昭和47年発行、奈良県遺跡地図第3分冊の16-B-412に該当する。
3. 調査は柏原地区改良事業に伴う事前調査として、昭和60年8月12日から9月15日、実働15日間をかけて実施し、御所市教育委員会　藤田和尊が担当した。
4. 現地調査および遺物整理、報告書作成には、下記の諸氏の協力を得た。
三野保之・尼子奈美枝・吉村公男・横出昌之・辻合靖司・奥田国光・西村之宏・糸魚川信夫・
田中ひとみ・藤村藤子・尾上昌子
5. 本書の執筆・編集には藤田があたった。

本文目次

- I はじめに
- II トレンチ調査の所見
- III 出土遺物
- IV まとめ

挿図目次

- 図1 位置図
- 図2 トレンチ配置図
- 図3 各トレンチ断面土層図
- 図4 出土遺物実測図

図版目次

- 図版1 1. 航空写真（真上から）
- 図版2 2. 航空写真（真上から）
- 図版3 3. 航空写真（北から）
4. 航空写真（東から）
- 図版4 5. 第1トレンチ（東から）
6. 第2トレンチ（東から）
- 図版5 7. 第3トレンチ（東から）
8. 第3トレンチ（西から）
- 図版6 9. 第4トレンチ（東から）
10. 第4トレンチ（西から）
- 図版7 11. 第5トレンチ（東から）
12. 第5トレンチ（西から）
- 図版8 13. 第6トレンチ（東南から）
14. 第6トレンチ（西北から）
- 図版9 15. 出土遺物

I はじめに

昭和60年7月19日に柏原地区改良事務所を経由して御所市長より改良住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘通知書および届出書が提出された。奈良県教育委員会文化財保存課を混じての協議の結果、試掘調査を行い遺構の残存状態を検討したうえで本調査を実施する旨の申あわせがなされた。

本遺跡は、御所市の東北端に位置し、昭和47年発行の奈良県遺跡地図第3分冊においては、16-B-412として登録されている。須恵器、土師器の採集により、古墳時代後期の遺跡とされてきた。

橿原市との市境ともなっている本馬山は、本遺跡の東方に接して約60mの比高差をもってそび立ち、山頂部には高地性集落としての本馬丘遺跡や、3基の古墳さらには、橿原市域となる東方尾根上には25基の古墳の存在が知られている。



II トレンチ調査の所見

調査地内には試掘のために6本のトレンチを設定した。第1～第5トレンチは、標高81.68mから81.98mの調査地内における低地水田面に設定したが、第6トレンチのみ、東方の本馬山に至る傾斜変換線上の、標高82.64mの畠地面に設定した(図2)。

第1～第5トレンチの層序は近似している(図3)。ほぼ水平堆積の状況を呈し、上層より、①約15cmの耕土、②約15cmの床土、③15～30cmの暗灰褐色粘質土でその下が暗青灰色粘土の地山となっている。耕土、床土にわずかに土師器小片が認められるほかは、ほとんど無遺物層であり、地山も常時の蓄水のため還元土となっている。遺構は全く認められない。

第6トレンチでは①約20cmの耕土、②約15cmの床土があり、その下層は第1～第5トレンチの③暗灰褐色粘質土のかわりに④10～15cmの黒褐色粘質土、さらに、黄褐色砂質土の地山となっている(図3)。④黒褐色粘質土は地山が東方から西方へと下るに従い、西方で若干厚みを増す。④黒褐色粘質土からは須恵器、土師器の小片約50点が出土しており、稀薄ながらも包含層と認めてよいであろう。

III 出土遺物

いずれも第6トレンチの④黒褐色粘質土内より出土したものであるが、全て小片で固化できるものはわずかである。

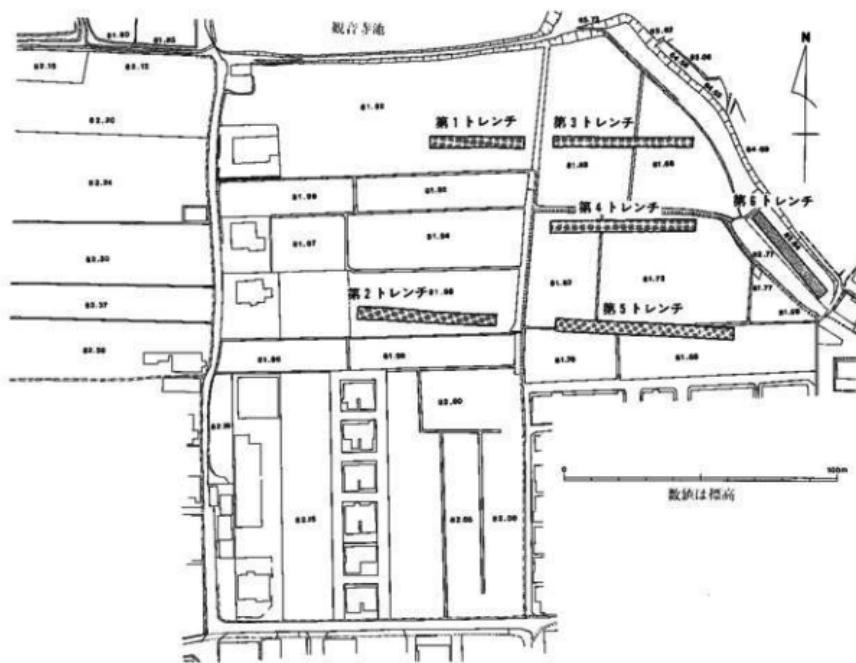


図2 トレンチ配置図

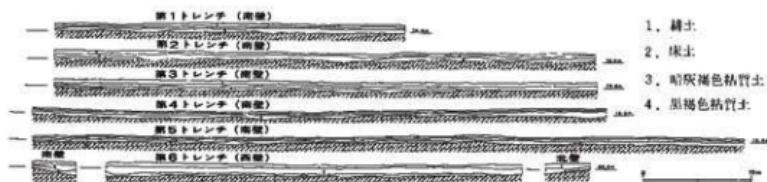


図3 各トレンチ断面土層図

- (1)は須恵器壺の底部付近の破片で、外面はヘラケズリ後ヨコナデ、内面はヨコナデで仕上げる。焼成は堅硬、灰色を呈し、胎土中には長径0.5mm程度の長石をわずかに含む。
- (2)は土師器杯の口縁部および体部の破片で内外面ともヨコナデで調整する。焼成は良好、色調は淡赤黄色を呈し胎土中には長径0.5mm以下のクサリ礫を大量に、長径0.5mm以下の長石をわずかに含む。
- (3)は土師器杯の口縁部の破片で、内外面ともヨコナデで調整し、口唇部内面にかすかな段をもつ。焼成は良好、色調は赤黄色を呈し、胎土中には長径0.5mm以下の長石をわずかに含む。
- (4)は土師質の羽釜の破片で、内外面ともヨコナデで調整する。焼成は良好、色調は淡茶褐色を呈し、胎土中には長径3mmの長石のほか、長径0.5mmの長石をわずかに含む。
- (5)は土師質の羽釜の破片で、内外面ともヨコナデで調整する。焼成は良好、色調は暗灰褐色を呈し、胎土中には長径1mm以下の長石をかなり含む。



図4 出土遺物実測図 (S. = 1/16)

IV まとめ

本馬西遺跡は遺物散布地として『奈良県遺跡地図』に登録されており、今回、柏原地区改良事業の一環として改良住宅建設の事前調査として初めての発掘調査を行なうことになった。

低地水田面に設定した第1～第5トレーンチにおいては、遺構の存在を確認できなかったのみならず、地山が當時の帶水により還元状態になっているなど、当該地については沼もしくはそれに近い泥湿地であったものと考えられ、むしろ遺跡の存在を積極的に否定するという皮肉な結果となった。

他方、東方に接する本馬山との傾斜変換線上に設定した第6トレーンチにおいては稀薄とはいえ、包含層の存在が認められた。同層内からは図4および図版9(15)の1～3の様な古墳時代後期に比定し得る須恵器、土師器や、4～5の様な中世の羽釜などが、混在して出土した。

この包含層の形成理由については、調査範囲が限定されているため、必ずしも断定できないとは言え、この傾斜変換線上に遺構があると考えるよりも、むしろ、東方に接する本馬山上に占地する古墳や本馬丘遺跡から滑落した土砂中に、これらの遺物が含まれていたとする蓋然性が高いものと思われた。

以上の試掘調査の所見をもとに、柏原地区改良事務所と協議を行なった結果、本調査への移行はしないこと、本馬山との傾斜変換線付近については立会調査を行なうことの2点を申し合わせて、現地調査を終了した。

図

版



1. 航空写真(真山地区)

2. 航空写真（東上から）





3. 航空写真（北から）



4. 航空写真（東から）